



# 宮崎大学学術情報リポジトリ

## University of Miyazaki Academic Repository

戸の外で：『暴力』より

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杵渕, 博樹, マイヤー, クレメンス, Meyer, Clemens メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/5370">http://hdl.handle.net/10458/5370</a>

## 訳者あとがき ― クレメンス・マイヤー『戸の外で』

クレメンス・マイヤー Clemens Meyer (一九七七―) は、ライプツィヒ―ハレ都市圏で生まれ育ち、今もそこを拠点とする土着性の強い作家である。作品世界の個性もさることながら、旧東独における不良少年としての過去、肉体労働者としての生活経験等の伝記的背景に加え、作家デビュー後の言動、風体もあつて（袖をめくると両腕にびっしり入れ墨が入っている）今ではドイツ文壇きつてのマッチョ作家として知られる。

マイヤーは二〇〇六年に自伝的長編『俺たちが夢見ていた頃』*Als wir träumten* で華々しくデビューし、二〇〇八年に第二作である短編集『夜と灯りと』*Die Nacht, die Lichter* でライプツィヒ書籍見本市賞を獲得している。二〇一三年には長編『石の中』*Im Stein*<sup>2</sup> がドイツ書籍賞最終候補に残り、さらに翌年ブレイメン文学賞を受賞するなどして話題となった。

ここに訳出した『戸の外で』*Draußen vor der Tür* は、マイヤーの三作目『暴力』*Gewalten* (二〇一〇)<sup>3</sup> の末尾に置かれた一篇である。『暴力』は「日記」*Tagebuch* とのジャンル表記が添えられているが、それぞれにタイトルを伴う諸篇に日付は無く、文中でも年号や季節、月が示唆される程度で、場合によっては「二〇〇九年だが春か夏か秋か定かでない、とにかく今よりは前だ」などという記述さえある。本作は日記作品の執筆に対して与えられる助成金を得て構想されたもので、マイヤーとしてはこの「文芸作品としての日記」という（お題）に対して、最大限自由に創意を凝らしたという

<sup>1</sup> 邦訳：『夜と灯りと』(新潮社)、二〇一〇年。

<sup>2</sup> 拙論参照：この世の異界の果ての果つ ― クレメンス・マイヤー『石の中』の物語構造と「日本」「ワセダ・ブレッター」第三号、二〇一五年

<sup>3</sup> Clemens Meyer: *Gewalten. Ein Tagebuch*, Frankfurt a. M. (Fischer) 2010.

拙論参照：日常的暴力あるがは暴力的日常の迷宮 ― クレメンス・マイヤー『暴力』の物語構造[規則的、変則的、偶然的] ― 大久保進先生古稀記念論文集(朝日出版社)、二〇一一年

ことなのだろう。彼は自らの日常生活を問い、「暴力」というキーワードで解いて見せた。タイトルの「暴力」は複数形。その心は、暴力の諸相とでも言ったところか。

第一話は書名と同じ『暴力』Gewaltと題され、泥酔して暴れ、その後医療施設に拘束された体験を描き、第二話『琥珀の中で』Im Bernsteinは米軍に捕らえられ長期間拘束されたトルコ系ドイツ人に取材した映画の構想を練る作者の心理を追い、第三話『ジャーマン・アモク』German Amokは、タイトルと同名のコンピュータ・ゲームの体験記である。無差別殺人を計画、実行し、殺害した人間の数が得点となるという殺伐としたゲームだ。第四話『ザクセン山地を探して』Auf der Suche nach dem sächsischen Berglandでは、死んだ親友の亡霊に付きまといわれ、第五話『Mの場合』Der Fall Mでは、猟奇的殺人事件の犯人との架空の対話を試みている。第六話『流れの中で』In den Strömenは、地元ライブツイヒ市内の水路でのカヌー遊びを報告するもので、主題自体はあまり「暴力的」ではないのだが、ついのように語られる友人知人の消息が、犯罪や暴力との接点を保っている。第七話『観客席』Tribünenでは競馬とフリーガンの暴動が話題となり、第八話『M市』Die Stadt Mはマクデブルクでの謎めいた一日を語り、第九話『ホイールの中で』Im Kesselではハノーファーのカジノでのルーレット体験が披露される。そして、第十話『アンダーカヴァーと頭』Undercover und der KopfでB級スプラッタ・ホラー風かつハードボイルドなベルリンを引きずり回された挙句、読者がたどりつくのが、最終話『戸の前』である。タイトルはボルヒェルトの同名戯曲のパロディだが内容は関係ない。

『暴力』全体の流れからすると、テンションの高い冒険の連続の後によく帰宅したと思ったら、最後の難関が待っていた、という仕掛けである。図らずも自宅への（侵入）を強いられる筆者の奮闘もそれなりに乱暴だが、彼の住環境もまた相当に「暴力的」である。ただし、語り口は一貫してリラックスしており、当面の難渋にもかかわらず情景はのどか

だ。

そして最後の最後に愛犬の死が報告される。ここでは例外的に日付も示される。実はこの犬の死は、『暴力』を構成するほかのエピソードにおいても何度か——過去の出来事として——言及されているので、この日付は『暴力』全体の時間軸上の定点となる。「日記」だからということで、少なくともテキストが成立順に配列されているのではないか、という一般的期待が生じるのは当然だが、この期待は裏切られるわけだ。また、この配置によって〈犬の死〉は「暴力」を象徴する特権的事件となる。表面的には相互の関連が希薄な諸篇であるが、読者は読み進むにつれて、まさにその、あえて日記としての前後関係を無視することによって生じる、それとは別の次元でのゆるやかな繋がりを意識させられ、作品末尾の〈時間軸上の定点〉かつ〈テーマの収斂点〉によって作品全体を振り返る契機を与えられるのである。このあたりはマイヤーのサービスピ精神の現れであり、構成意識の高さの証であると言えるだろう。

ちなみに「ロコモティフエ」と「ヒュミー」はともにライブツイヒのサッカー・チームである。